

恩原1・2遺跡における安山岩製石器の石材産地推定

科研費
KAKENHI

本発表は、JSPS 科研費 23H00025（古本州島中央部における先史狩猟採集民の総合的研究）による成果の一部である。

1) 奈良県立橿原考古学研究所、2) 岡山理科大学
光石鳴巳¹⁾、白石純²⁾

はじめに

岡山県鏡野町上斎原に所在する恩原1・2遺跡では、1984～1997年に14次にわたる発掘調査がおこなわれ、始良 Tn テフラ (AT) の下位、大山笹ヶ平火砕流 (オドリ) 上面、ソフトローム層で、いずれもナイフ形石器を指標とする石器群 (R 文化層、O 文化層、S 文化層) を検出している。利用石材について、藁科哲男氏が恩原1遺跡 R 文化層 15 点、恩原2遺跡 S 文化層の4点を蛍光X線分析 (XRF) による産地推定をおこなっており (藁科 2009、1996)、恩原2遺跡 S 文化層では岩石薄片や粉末試料による岩石学的な検討結果も示されている (柴田ほか 1996)。

筆者らは2015年以来、安山岩製石器の表面に生じた微小な欠損面を利用した XRF 分析による石材産地推定の試みを続けている (光石ほか 2021)。新たに遺物を傷つけることなく分析可能な方法である。本研究では、恩原1遺跡 R・O・S 文化層、同2遺跡 S 文化層に帰属する安山岩製石器から合計33点を抽出して分析した。対象には上述の分析済み遺物も含めており、それぞれの結果を追認することができている。得られた結果は国分台産石材が主というものが、一部に法印谷産や金山産、ごくわずかだが二上山産の可能性のある石材が認められた。

分析結果

①恩原1遺跡 R 文化層 (図3)

- ◇藁科氏による分析結果は、白峯産8点、法印谷産5点、国分寺産1点 (以上、五色台産地) と二上山産が1点。今回の分析でもこれらの結果がおおむね追認された。
- ◇BJ26-1 (新規に分析) と、BM19-13 (藁科氏が国分寺産と判定) については国分台の分布域から左方に外れる。評価を保留。
- ◇全体として五色台産が主体とみられるが、二上山産と考えられるものが1点あることは注目される。

②恩原1遺跡 O 文化層 (図4)

- ◇既往の分析なし。今回新たに2点を分析。いずれも既知の産地とは明瞭に合致しない。
- ◇BY26-13 は金山産の可能性はあるが、分布域からはやや外れる。
- ◇CK34-13 (横長剥片石核; 報告書で粗粒軟質安山岩) は、成分組成で Si 比が 38.94 と著しく低く (安山岩は 48.7 ~ 63.5)、玄武岩などの可能性が考えられる。

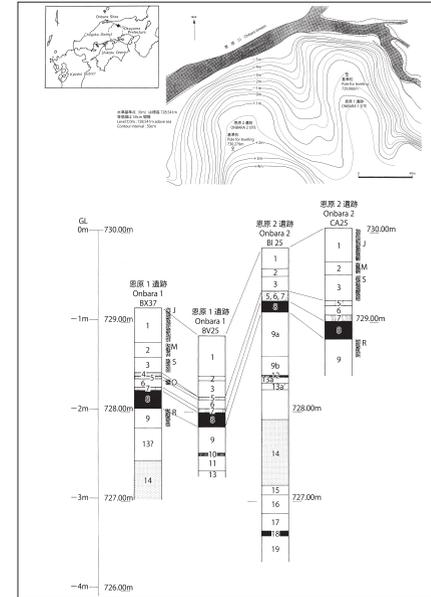


図1 恩原遺跡の地形と層序
(『恩原1遺跡』『恩原2遺跡』報告書より)



図2 新たに分析対象とした石器
(上: 恩原1遺跡、下: 恩原2遺跡)

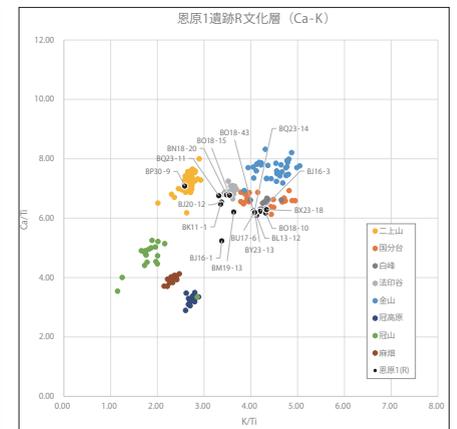
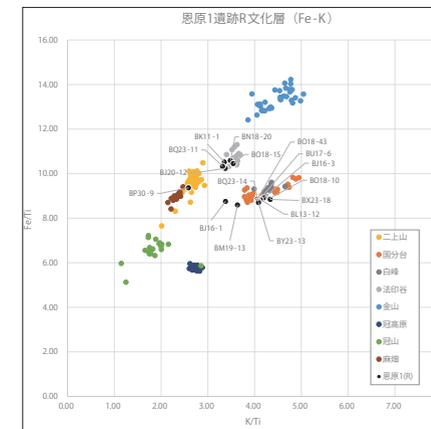


図3 恩原1遺跡 R 文化層における安山岩製石器の蛍光X線分析結果

③恩原 1 遺跡 S 文化層 (図 5)

◇既往の分析なし。2 点を分析。

◇いずれも Fe 図で国分台産の可能性があるが、Ca 図で大きく下方に外れる。評価を保留。

④恩原 2 遺跡 S 文化層 (図 6)

◇藁科氏による分析結果は、白峯産 2 点 (BH32-3、BR25-5)、金山産 2 点 (BM30-16、BN29-16)。今回の分析でこれらの結果が追認された。

◇BM34-26 は金山産とみられ、柴田氏らによる分析結果を追認された。

◇BJ28-5 は、柴田氏らが中国山地脊梁部から日本海側に分布するアルカリ・カンラン石玄武帯に由来する可能性が高いとしたもの。白石はこれを麻畑産と考えた (白石 1999)。今回の分析では Fe 図で冠山領域近く、Ca 図で麻畑領域から左方に外れる位置。産地を特定し難いが、柴田氏らの見解は追認されると思われる。

◇新たに分析した 7 点のうち、6 点については国分台産もしくはその可能性が考えられ、1 点については、断定できないが二上山産の可能性もある。

まとめ

恩原 1 遺跡 R 文化層、同 2 遺跡 S 文化層については、報告書に結果が掲載済みのものも含めて XRF 分析を実施し、分析結果を追認することができた。恩原 1 遺跡 R 文化層で二上山産、法印谷産石材の利用が追認できたことは、AT 下位文化層の様相を考える上で重要である。恩原 2 遺跡 S 文化層では国分台産、金山産の石材に加え、二上山産あるいは麻畑産の可能性を思わせる個体が確認できた。

恩原 1 遺跡 O・S 文化層では分析できた点数が少なく、既知の産地と明確に合致する結果は得られていないが、粗粒軟質安山岩とされてきた O 文化層の横長剥片石核について、玄武岩の可能性が考えられたことには一定の意味があるだろう。

これらの結果は、旧石器時代集団が複数の安山岩 (サヌカイト) 産地を利用し、時に類似する石材を利用していた可能性を示すとともに、中・四国から近畿にわたる広域移動の可能性を示唆する。

謝辞

分析実施にあたり、松本直子氏、清家 章氏 (岡山大学) にご協力いただき、尾上元規氏、上梶 武氏 (岡山県教育庁文化財課) には県指定文化財としての取り扱いについてご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

参考文献

柴田次夫・野上健治・稲田孝司 1996 「岡山県上斎原村恩原 2 遺跡出土石器の記載岩石学的特徴」『恩原2遺跡』
白石 純 1999 「蒜山原旧石器時代遺跡群の石器石材」『岡山理科大学自然科学研究所研究報告』第 25 号
光石鳴巳・白石 純・森先一貴 2021 「瀬戸内東部の旧石器遺跡におけるサヌカイト産地推定研究の課題」『旧石器研究』17

藁科哲男 2009 「恩原 1 遺跡 R 文化層(AT 火山灰直下)出土サヌカイト製遺物および黒曜石製遺物の原材産地分析」『恩原 1 遺跡』

藁科哲男 1996 「恩原遺跡出土のサヌカイト・黒曜石製遺物の石材産地分析」『恩原2遺跡』

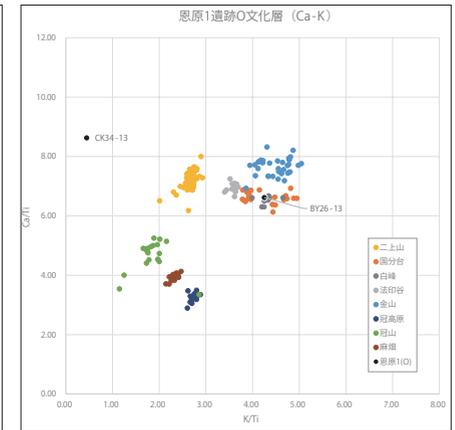
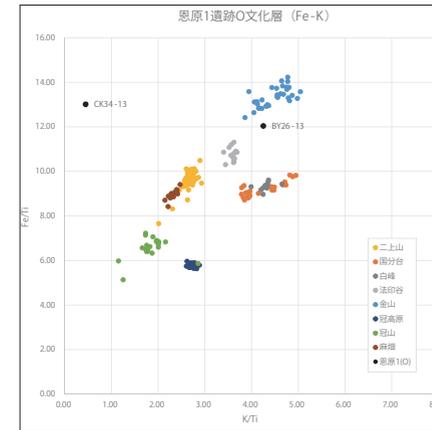


図 4 恩原 1 遺跡 O 文化層における安山岩製石器の蛍光 X 線分析結果

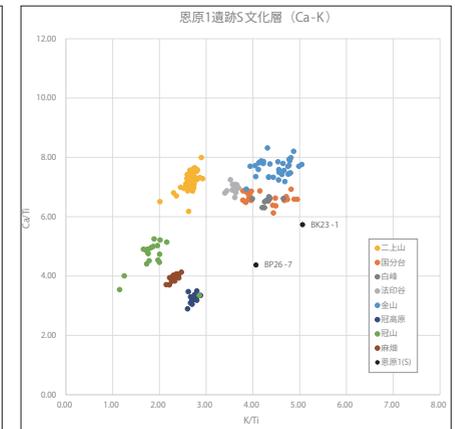
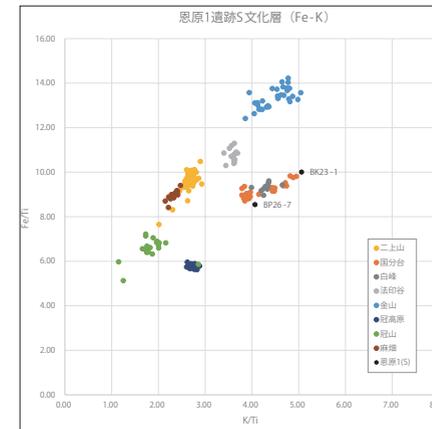


図 5 恩原 1 遺跡 S 文化層における安山岩製石器の蛍光 X 線分析結果

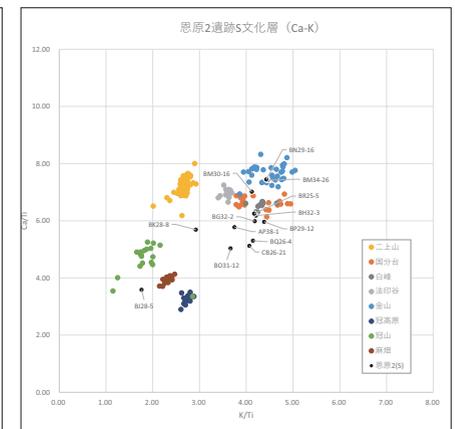
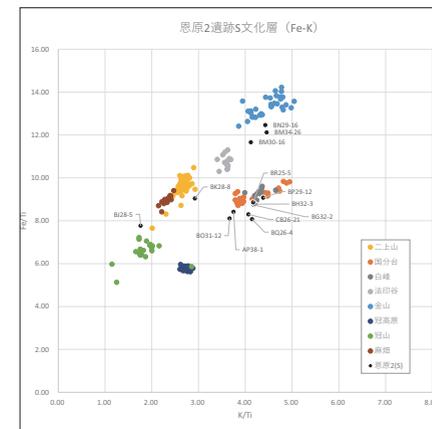


図 6 恩原 2 遺跡 S 文化層における安山岩製石器の蛍光 X 線分析結果